

グローバルな視点と ホスピタリティタイムインドを 実践の中で育みたい

学校法人トラベルジャーナル学園ホスピタリティーズ専門学校 理事長
取材・文／堀水潤 撮影／中岡邦夫

森谷博



【理事長プロフィール】1960年生まれ。日本大学卒業後渡米。89年学校法人森谷学園（現トラベルジャーナル学園）入職。91年トラベルジャーナル入社。2000年トラベルジャーナル代表取締役。07年トラベルジャーナルグループ代表就任。

【学校プロフィール】1973年トラベルジャーナル旅行学院として開校。80年トラベルジャーナル旅行専門学校に。07年学校法人トラベルジャーナル学園ホスピタリティーズ専門学校に校名変更。併設校にホスピタリティーズ専門学校大阪ほか。

この10月、観光庁が発足しました。これは、わが国が「観光立国」政策を強化する意味で歓迎すべきことです。これまで、英語標示の不徹底など、外国人旅行者が不便を感じることは少なくありませんでした。しかし観光資源は豊富な国です。先進諸国と比べ、観光政策面で立ち遅れていた分、発展が期待されることは間違いありません。

その際、キーワードとなるのは「ホスピタリティ」だと思います。相手の立場で考え、行動できること。日本人が大切にしてきた「おもてなしの心」です。

観光業界の要請によって設立され、トラベルジャーナル旅行専門学校の名で親しまれてきた本校は、07年にホスピタリティーズ専門学校に校名を変更しました。学生には、このホスピタリティタイムインドを身に付けてほしいと願っています。当初、馴染みの薄い言葉であり、その校名に、照れくささを感じないだろうかと心配もしましたが、若者は抵抗なく受け入れてくれました。これは、心強いことです。

本学園の母体であるトラベルジャーナルグループは、旅行業界誌の発行などを通じて、業界から厚い信頼を得ています。私はグループの経営にも携わつてい

るためよく分かるのですが、業界が学生に求めているのは、まさにこのホスピタリティタイムインドです。この能力は、知識ではなく、体験を通じて心に刻み込まれていくものです。そのため本学園では、内外の企業の協力のもと、海外研修やインターンシップのほか、多彩な実習を取り入れています。業界と一緒になった人材育成です。

もう一点、業界から求められ、私も強く望むのは、グローバルな視点を持つことです。その近道は、若いうちに積極的に海外にでること。外国から学ぶべきものはまだまだ多く、日本の良さについての認識を深めつつ、国際的な視野を身に付けてほしいと思います。本学園は、シアトルやメルボルンに提携校を持ち、留学制度を整えています。帰国した学生をみると、語学力もさることながら、自立心の芽生えが感じられます。

昨今、大学に観光系の学部・学科が新設されています。業界を活性化させるうえで歓迎すべきことですが、本校の役割は大学と異なります。それは実践力を鍛え、ホスピタリティタイムインドを育むこと。その点、学生からよく聞く、「早く業界で活躍したい」という声は、頼もしい限りです。